

『マハーバーラタ』における裏切り

前川 輝光

はじめに

『ラーマーヤナ』と並び、ヒンドゥー教二大叙事詩と呼ばれる『マハーバーラタ』は、しばしばインドで最も愛されている物語とも言われる。それはおそらくちょうど中国人にとっての『三国志通俗演義』（以下『三国志』）のような存在である。

中国人、中でも中年以上の男性は、宴席などで興に乗ってくると、『三国志』の登場人物の中では誰が好きかというような話を始めることが多いとはしばしば耳にするところだが、それだけ『三国志』の登場人物たちは中国人の心に根を張っているのである。インド人にとっての『マハーバーラタ』も正に同様と言ってよい。

『三国志』は日本にも馴染み深い。一読、印象づけられるのは、合従連衡のすさまじさである。昨日の敵は今日の友、今日の味方が明日も味方とは限らない。裏切りに次ぐ裏切りが物語を動かしていくと言っても過言ではない。権謀術数の書としても『三国志』は読まれてきたと言う^り。ところが言わば「インドの三国志」とも言える『マハーバーラタ』には、裏切りがほとんど見当たらない。このことにはある日、『三国志』と『マハーバーラタ』を比較してふと気がついた。

『マハーバーラタ』は痛切な悲劇である。過酷な運命に翻弄される人間たちのあえぎで綴られた叙事詩である。パーンダヴァ五王子を陥れ、滅ぼそうとのカウラヴァ百王子の姦計に次ぐ姦計など、悪は描かれている。善の側とされるパーンダヴァ五王子も勝利のためには姦計に手を染めることもあった。しかし、そうした悪の中に、裏切りあるいは寝返りを捜すと、なかなか見つからない。悪人たちでさえ、裏切らないし、寝返らない。そのことはお

そらく『マハーバーラタ』全体の性格を考える上で重要なポイントの一つである。これは筆者にとって印象的な発見だった。そこで、本稿でこの問題について考察することにしたのである。

『マハーバーラタ』はパンドヴァ五王子とカウラヴァ百王子の対立を中心に本筋部分以外にもおびたしい付加物（物語、宗教思想、政治思想…）を抱え込んでいる。筆者がここで問題にしているのは本筋部分である。本筋部分の主要登場人物に裏切りが目立たないのである。付加物については、必ずしもそうではない。最初にこのことを確認しておきたい。

1. 『マハーバーラタ』のあらすじ

『マハーバーラタ』における裏切りの問題を考える土台として、まず、『マハーバーラタ』のあらすじを振り返っておきたい。

ハースティナプラ国王シャーントヌは、ガンジス河の女神ガンガーに恋をし、求婚する。ガンガーは、自分がどんなことをしてもそれを止めたり、訳を問い質したりしなければとの条件のもと、承諾する。ガンガーはシャーントヌとの間に次々に7人の子を生むが、生み落とすや、皆殺してしまった。シャーントヌは約束に縛られて、ガンガーのなすがままだったが、8番目の子が生まれた時には、耐え切れず、殺害を食い止める。王の約束違反により、ガンガーはシャーントヌのもとを去る。この8番目の子がデーヴァヴラタ、後のビーシュマである。

ガンガーが去って数年後、シャーントヌ王は漁師の娘サティヤヴァティーに一目ぼれし求婚するが、サティヤヴァティーの父親に「私の娘の子が王位を継承できるなら」と条件をつけられ、苦悩する。成長したデーヴァヴラタは、文武両道に秀で、理想的な王位継承者と期待していたからである。父の悩みを知ったデーヴァヴラタは、自らの王位継承権を放棄し、王国の将来に禍根を残さぬため、生涯の不婚を誓う。この困難な誓いの後、彼はビーシュ

マ（恐るべき者）という名で呼ばれるようになる。かくてシャーントヌはサティヤヴァティーを妻とし、二人の間には二人の王子が生まれる。

ほどなくシャーントヌ王は死去する。ビーシュマの父と王国への献身も空しく、シャーントヌの二人の王子も、共に跡継ぎを残すことなく夭折する。サティヤヴァティーはビーシュマに誓いを放棄し、王となり、王国に跡継ぎを与えるよう懇願するが、ビーシュマはこれを受け入れず、サティヤヴァティーの結婚前の子、聖仙ヴィヤーサ（『マハーバーラタ』の作者とされている）が王子の妃たちに子を授けることになる。ドリタラーシュトラ、パーンドゥ、ヴィドゥラの三兄弟である。ヴィドゥラは王子の妃の下女とヴィヤーサの間の子であったため、王子にはなれず、兄二人の相談役となった。

長男のドリタラーシュトラは生来盲目であったため、パーンドゥが王位を継ぐ。この強力な王は狩猟の最中、誤って聖仙リシ・キンダマとその妻を殺してしまったため、王位を退き、森に行かざるを得なくなる。しかもキンダマの呪いのため、生涯女性に触れられなくなっていた。パーンドゥは未だ息子にめぐまれていなかった。しかし、第一夫人クンティーが若き日に聖仙ドゥルヴァーサから授かった呪文の力で、パーンドゥは5人の息子を授かることになる。これがパーンダヴァ五王子即ち、ユディシュティラ、ビーマ、アルジュナ、ナクラ、サハデーヴァである。

パーンドゥ退位後、盲目の兄ドリタラーシュトラが即位する。パーンドゥは第二夫人マードリーの色香に負けその身体に触れ、リシ・キンダマの呪いにより死亡する。クンティーに育てられた五王子はやがてハースティナブラでビーシュマ、ドリタラーシュトラに庇護されることになるが、ドリタラーシュトラの百人の王子達はこれを好まなかった。五王子と百王子の対立はユディシュティラと百王子の長男ドゥルヨーダナの間でのハースティナブラの王位継承権争いによって決定的となる。これを案じたビーシュマの建言で王国は分割され、ドリタラーシュトラと百王子はハースティナブラを、ユディシュティラは辺境の地インドラプラスタを支配する。

インドラプラスタは繁栄を極め、ユディシュティラは帝王即位式を挙行す

る。絶世の美女ドラウパディーも五王子共通の妻となっていた。ドゥルヨーダナは嫉妬に苛まれる。そこで母方のおじシャクニの入れ知恵で五王子をサイコロ勝負に誘い、シャクニの手で五王子から王国、五王子自身、妻ドラウパディーに至るまで全てを巻上げてしまう。ドラウパディーのドリタラーシュトラへの必死の訴えにより、一旦は勝負はなかったことにされ、五王子は王国と自分達及びドラウパディーの自由を取り戻すが、その後ユディシュティラが再度サイコロ勝負を強いられ、またも敗北する。その際の条件に従い、五王子は13年間追放生活を送ることになる。12年を森で過ごし、13年目は百王子方に居場所を知られずに過ごさなければならなかった。もしこの1年間に見つかってしまえば、再び12年間、森で暮らさなければならなかった。

五王子は追放の13年を何とか乗り切り、百王子側に王国（インドラプラスタ）の返還を要求するが、ドゥルヨーダナはこれを拒否。両陣営の対決は避けられないものとなって行く。かくてハースティナプラ近郊クルクシェートラの地に、両陣営の大群が集結する。

いよいよ大戦が始まろうという時、五王子最高の戦士アルジュナは、突如戦意を喪失する。敵方に恩ある人々の姿を見かけたからである。パーンダヴァ五王子・カウラヴァ百王子共通の大伯父ビーシュマ、同じく両者共通の武術の師ドローナなどである。二人とも心はむしろ五王子側にありながら、誓いや禄に縛られて百王子方に立って戦わなければならなくなっていた。アルジュナの御者をつとめていた五王子の従兄弟クリシュナ（実はヴィシュヌ神の第8の化身）は、アルジュナに戦士の義務などを説き、戦意を回復させる。

いよいよ大戦は始まり、死闘が続く。百王子方最初の総司令官ビーシュマは、戦闘10日目にアルジュナに身体中に矢を突き立てられて倒れる。ビーシュマの後を継いだドローナも五王子方の姦計により15日目に倒される。百王子方第3の総司令官カルナは、17日目にアルジュナの矢に倒れる。

カルナは実はクンティーのパーンドゥとの結婚前の子で、アルジュナの

